

〔学会動向〕

地方史研究協議会大分参加記

野口 喜久男

本年度の地方史研究協議会大会が一〇月一六日―一八日の三日間、鹿児島市で開かれた。

地方史研究協議会は、戦後、近世庶民史料調査が全国的な規模で行われた中で、中央の人と地方の人が結びついて地方史研究を推進しなければ本当の歴史の研究の発展はありえないということになって、昭和二五年秋に結成された学会である。隔月に会誌「地方史研究」を発刊し、今日まで一―三号を数える。そのほか「地方史研究心携」（昭二七）「近世地方史研究入門」（昭三〇）「日本産業史大系」全九巻（昭三四）等の地方史研究のための基本図書を刊行して来た。

大会は毎年、共通論題をかゝげ、昭和三一年以来はほとんどの年に地方で開いて、その地方の諸問題を取上げて来た。

最近の大会のテーマと開催場所は次の通りである。

一九六五年 東北地方史の諸問題

（青森）

- 一九六六年 地方史研究の現況と課題（東京）
 - 一九六七年 四国地方史の諸問題（高知）
 - 一九六八年 近代地方史の研究（東京）
 - 一九六九年 北陸地方史の問題点（金沢）
 - 一九七〇年 幕藩制の崩壊と関東（浦和）
- そして、本年のテーマは「西南日本史の諸問題」で、薩摩藩と沖繩史の問題が集中的に取上げられた。
- 発表論題とその概要を述べる。（共通論題のみ）
- 1 天平期に見る薩摩国 本蔵久三（鹿児島）
― 正税帳を通して―
 - 2 中世大隅地方の農業経営について 小園公雄（鹿児島）
 - 3 南九州と「門」^{かど} 桑波田興（鹿児島）
 - 4 薩摩藩琉球統治確立の政治経済的背景 喜舎場一隆（沖縄）
 - 5 薩摩藩後期藩政の展開とその歴史的性格 黒田安雄（福岡）
― 安永・天明期の藩政改革―
 - 6 幕末薩摩藩の対沖繩政策をめぐる問題点 上原兼善（沖縄）
 - 7 幕末期砂糖専売下、奄美大島の島役人について 山田尚二（鹿児島）
― 盛岡家文書を中心として―

1は「正税帳」によって、律令政府の薩摩に対する教化懐柔策を論じたもの。2は中世大隅の農業経営を圃、在家経営を中心に考え、村落の存在形態を論じたもの。3は南九州各地の「門」がその農村構造の共通性にもかゝらず、大名領主の支配形態に応じて各地で異なった様相を示すことを指摘し、「門」の本質にせまらんとしたもの。4は慶長一四年の島津氏の琉球侵入の目的は琉明交易の利権の確保にあったが、寛文六年の羽地朝秀の登用によって薩摩への同化策が強化され新たな展開をとげたことを論じたもの。5は島津重豪の安永・天明期の藩政改革が藩主親裁体制の確立で、政策的には城下商人を用いての商品生産拡大策であって、天保改革の素型をなしたとする。6は薩摩藩の天保改革は沖繩に即して云えば、沖繩での対仏貿易の拡大であり、そのための支配の強化であり、これより農村の荒廃が急速に進んだとする。7は薩摩藩のつくり出した「砂糖地獄」の下での農民の苦悩とは対極的に、島役人が家人・下人労働力と黍畑を集積していった状況を論じた。8は多種多様の夫役の検討によって、それが著るしく中世的な性格をもっていた

ことを論じた。

これらの諸問題を総括する討論が二日目の午後に行われ、発表者の補足説明と質疑応答、意見の交換があつて問題がより深められた。

なお、記念講演「土地所有権の史的展開―薩摩土地制度史との関連に於いて―」で、永原慶三氏（東京）は荘園制下における農民の土地所有権の成立過程を、豊富な事例をあげて圃―在家―門と段階的に跡づけた。三日目は鹿児島下の史跡見学が行われた。

以下、二、三の感想。

(一) 旧来の地方史研究は、(1) 中央の偉い先生が地方にやって来て史料を集め、中央に帰ってそれを論文にまとめ学会誌に発表する。地方の人々は自分たちの町や村の歴史については何一つ知らされなかった。そうして中央の研究者は中央の立場で、中央の方法を物指にして地方をはかり、その物指に合わぬものを「辺境の特殊性」などとときめつけるか、(2) 地方の研究者は逆に自分の町や村にだけ目を奪われて、狭い郷土愛に墮してしまふかの大きくは二つのいずれかであったといつてよい。薩摩藩について云えば、小野武夫、土屋喬雄氏の研究や「鹿児島県史」の編纂によって、薩摩藩の歴史が解明されたが、同時に「封建制の極北」(特殊中の特殊な藩) というレッテルが貼られて、以後の研究の発展を著るしく妨げたことは否定できない。

しかし、戦後、地方に多くの研究者が育ち、中央の立場・方法によってでなく、地域に密着した地味な、そして着実な研究の蓄積が行われて来て、「辺境の特殊論」を克服して、地方史をわが国幕藩体制史の中に正しく位置づけ理解するようになった(学問の民主化である)。

本大会の発表者はいずれも鹿児島・沖縄の在住もしくは出身(単に出身であるというのではなく、出身地と密接な繋りをもち、その立場に立っている)であった。地域に密着して、本当の意味で地方の歴史研究を推進して来た人たちであった。

(一)わが国の歴史学会で沖縄史が真正面から取上げられたことはなかった。従来沖縄史研究は中央または沖縄の研究者が個々ばらばらに、個人的関心に従ってなされて来ていて、個人的な繋りはあったが組織的な繋りは全くなかったといつてよい。本大会では沖縄の問題が西南日本の諸問題として捉えられ、沖縄から多くの研究者が参加して中央の研究者との間に学問的交流が始まった。

中央と沖縄(地方)が共同して沖縄史を解明する端緒が開かれたといつてよいと思う。なお、沖縄は第二次大戦末期に米軍の攻撃によって徹底的に破壊されたので、沖縄史の史料は沖縄には殆どない。政府、薩摩藩の沖縄関係史料が東京にあるのみである。そして、

戦後四半世紀に及ぶ米軍支配時代の史料が近くアメリカに持去られんとしているという。このような沖縄の問題は単に沖縄の問題ではなく、われわれの問題である。問題の解決は沖縄の研究者だけに任せておいてよいというものではない。広い学問的協同があつて始めて解決される問題であると思う

(二)共通論題が薩摩藩・沖縄に関するものであったので、本大会は今までと異なつた意義を持つていたと思うのであるが、そう手放して喜こんでばかりは居られない。研究者の研究條件は、とくに地方在住者の場合は劣悪である。研究仲間と時間と金の不足は絶望的であることすらある。中央と地方との交流もそう盛んとは云えない。本会での発表・討論が充分かみ合わなかつたことが現段階の実情を示していると思う。本当の意味での地方史研究は今、始まったばかりである。道は決して平坦で、近くないと思う。

(大分工業高等専門学校校務)